

中国における日本語教育

李 永 連

はじめに

言葉というのは、人類社会の重要な文化と交流道具として大きな意味を持っている。本論文は学校教育と社会教育の二つの面から中国における日本語教育の状況とその問題点及び今後の発展動向について論じた。現代化を目指して、著しく発展している中国でますます高まってきている日本語ブームは、これからの中日両国の政治、経済、文化、教育などの交流と発展において、きっと大きな影響を与えるであろうと思われる。

中国の日本語教育は、主に二つのルートがある。一つは学校教育における日本語であるが、もう一つは社会教育における日本語教育であると考えられる。

I. 学校教育における日本語教育

中国の学校教育制度は小学校、中学校、高等学校、大学から成っている。その修業年限は、日本の現行学制と同様の小学校6年、中学校3年、高等学校3年、大学4年の「6、3、3、4」制を取っているところが殆どであるが、一部の地域では中小学校の段階で「5、4、3」や「5、3、3」などの実験的な学制が採用されているところがある。また大学の段階では、一部の理工科専攻と医学専攻は5年制で、高等専門学校は主に3年制と2年制である。1995年の統計に依ると、全国の学校数は76万5,100校で学生数は1億9,677万3,000人であった。その内、小学校は66万9,000校で、生徒数は1億3,195万人であった。中学校と高校は合計で8万1,000校で、生徒数は5,371万人で、中等専門学校は4,049校で、学生数は372万2,000人であった。大学は1,054校で、学生数は290万6,000人であったという。

上記の学校教育の中で行われる日本語教育については、70年代の後半期に溯ることができる。当時、一部の小学校で日本語をカリキュラムに入れたところがあり、例えば北京市教育局は小学校の日本語授業用のテキストを編集し、一部の小学校で実施した。しかし80年代に入ってから段々減ってきて、現在一部分の沿海地区（大連で18校、江蘇省で1校等、小学校5年から日本語を選択科目に組み入れている）の他は、殆ど廃止された。その代わりに条件の整った都市部の小学校では5年生から英語の授業を行う所があ

る。農村部ではその条件はまだ整っていないので、小学校の段階では外国語を教えないことになっている。

学校教育の中に本格的に日本語教育を取り入れているのは中学校からである。この中学校からの外国語教育は50年代の初めごろに既に始められた。ただ、その当時は、国全体でロシアに学ぶ傾向があったため、学校教育にもロシア語を取り入れていた。しかし60年代に入ってから英語の教育が段々重視されてきて、70年代の末頃までに英語教育はすでに主導的な地位を占めるようになった。現在、中国の中学校、高校の生徒は主に英語を勉強している。ロシア語を勉強している生徒は約30万人で、日本語を勉強している生徒は14万人であるという。

この中学校からの日本語教育は1972年の日中国交正常化がきっかけになって、1983年から1984年がピークで、約30万人に昇った。1985年からだんだん減ってきている（1990年には約16万人、1993年には約14万人）。それは英語が第一外国語として重視されて、大学の受験科目、留学、就職などにも主に英語が要求されるからである。現在全中国で、日本語の授業を設けている中学校は約400校で、高校は約200校である。

この中学校、高校段階の日本語教育は主に東北地域の三つの省（中国大陆には30の省と自治区と中央政府の直属の市という行政区画がある。東北地域は遼寧省、吉林省、黒竜江省からなっている）及び内蒙古自治区で行われている。この三つの省は日本語を勉強している生徒数の89.5%を占め、内蒙古自治区は7%を占めている（1990年8月から1991年2月までの統計）。つまり東三省と内蒙古自治区は中学校と高校で日本語を勉強している全中国の生徒の96.5%を占めている。その中でも吉林省は特に多く、約半分を占める。それは吉林省に朝鮮族の人が多いためである。特に延辺朝鮮族自治州には日本語を教える学校が多い。朝鮮語と日本語の文法は似ているところが多いので、勉強し易いためか、延辺朝鮮族自治州では1980年代までは、朝鮮族の中学、高校の外国語科目はほぼ100%日本語だった。しかし、今では70%近くまで落ちている。中学校と高校で日本語を教える教師は1981年に一番多く、2,411人に達したが、現在は約1800人である。

これらの学校で使われているテキストは、主に1982年当時の教育部に制定された「中等学校日本語授業のシラバス」に編集されたもの（人民教育出版社1984－1985年版）で、中学校は6冊（500コマで、1コマは45分－50分）で、高校は3冊（402コマ）である。1993－1994年度からは新しい教材が使われるようになった。

そして大学段階の日本語教育について、現在の1,054校の大学では、日本語科がある大学は90校位あり、約6,000人の学生が勉強している。大学の中の日本語科は主に日中国交正常化の70年代と80年代に設けられたが（1949年に建国してから60年代までは18校しかなかったが、70年代に39校、80年代に23校増えた）、地域別で日本語を勉強している学生

数を見ると、東北三省と北京市、天津市で約50%を占めている。都市別に見ると、北京市が一番多く、約20%くらいを占めている。次は上海市で、約10%、三番目は大連で、約9%を占めている。これらの日本語学科で日本語を担当する教師は約1千人である。教材はそれぞれの大学で編集されたものもあるし、上海外国語学院と北京大学などに編集されたものを使う所もあった。また東京外国語大学が編集した『日本語』を使うところもあった。90年代に入ってから国家委員会に許可された「大学日本語学科の基礎段階における授業シラバス」に従って、遼寧師範大学と上海外国語学院が新しい教材を編集している。その第一冊は1991年から試験的に使われている。

その他に中国の大学には共通外国語（日本の一般教養科目のなかの外国語科目に相当する）という授業科目があって、1,054校の中で約600校の大学が共通外国語として日本語を取り入れている。学生数は約8万人で、教師は約1,500人である。地域から見ると北京市には50校以上もあり、学生数は約8,000人で、一位である。次で吉林省で、40校近くあり、学生数は7000人近くいる。それから遼寧省、上海等の順である。教材は主に上海外国語学院が編集した『日本語』、東京外国語大学が編集した『日本語』、周炎輝氏が編集した『理工科日本語』、大阪外国語大学が編集した『現代日本語』、『中日交流標準日本語』、北京大学が編集した『基礎日本語』等が挙げられる。現在、国家教育委員会が発表した「大学日本語授業のシラバス」（非日本語科用）によって新しい教材が編集されている。その第一冊は1991年8月出版された。共通外国語としての日本語はこれからも盛んになるであろう。今の中国では英語、日本語、中国語を身につけることが提唱され、日本語を第二外国語（一般的には英語が第一外国語として勉強されている）として勉強する人もますます増えていくであろう。

Ⅱ. 社会教育における日本語教育

社会教育における日本語教育には次の三つがある。一つは職員大学、テレビ大学、夜間大学、放送大学、通信大学などいわゆる成人高等教育機関での日本語教育である。これらの成人高等教育機関は全国で1,000校以上もあって、その中に日本語科のある大学は30近くある。学生数は1,100人、専任教官は約40人である。日本語科以外での共通外国語としての日本語の授業はそう多くない。20校位の大学に共通外国語の日本語があるが、学生数は約2,000人、専任教官は8人程度である。

二つ目はテレビ、ラジオ放送などを利用して、通信教育で日本語を教える方法である。中国の日本語テレビ放送は1984年に北京の中央テレビジョンから始まって、その後各省と一部の大都市のテレビ局に普及した。日本語のラジオ放送も1973年から上海放送局か

ら始まって、間もなく各省と一部の大都市へと普及した。テレビとラジオ放送を利用して日本語を勉強する人数の把握は難しいが、年間何十万人にのぼると思われる。これは学習者数の最も多い教育手段である。その教材は主に『日本語を学ぼう』、『標準日本語』、『新しく編集された日本語』、『日本語入門』等が挙げられる。

三番目はアマチュア日本語学校で、全国に数百校あり、学生数は5万人ぐらいである。教師は主に兼任で、週2、3回の授業があり（主に夕方の午後5時半から7時までの時間を利用している）、1年コースと2年コースに分かれて、初級と中級の日本語が教えられている。テキストは主に上海外国語学院が編集した『日本語』、日本文化庁が編集した『生活日本語』、大阪外国語大学が編集した『現代日本語』、東京外国語大学が編集した『日本語』等を使っている。

そのほかに、それぞれの必要に応じて行われる様々な日本語訓練班がある。たとえば「留日日本語訓練班」、「技術研修のための日本語訓練班」等で、主に外国語学院と師範大学によって行われる。勉強の時間は6ヶ月－12ヶ月で、「聞く」と「話す」を重点とした強化授業が行われる。例えば、大連外国語学院では、80年代の初め頃から今日までにこの方法で4,000人近くの出国人員が養成された。

Ⅲ. 問題と動向

1. 日本語教師の全体のレベルはまだ低い

近年来、国家教育委員会は大学段階の日本語教師のレベルを高めるためにいろいろな措置をとってきたが〔例えば交替で来日して研修し、特に1980年から5年間で行われた「日本語教師養成班」（これは日本文部省の協力で行われたが、日本の場合は「日本語研修センター」という。普通は「大平班」ともいう）は594名日本語教師を研修させて、大きな成果を上げた〕、一部の中堅教師は出国（外国で就職）したり、企業へ転勤した（主に外資企業へ）ため、日本語教師の全体のレベルは低くなってきた。これは勿論政府の経済優先の政策と関係があるが、人材養成の方からみればもっとも優れた教師の確保はなによりも大事なことであろう。また、中学校、高校の教師には、出国のチャンスはあまりないし、各種の訓練班も少ないし、中には生まれてから日本人と話をしたことのない教師も大勢いる。大学段階の教師よりそのレベルはもっと低いことが分каろう。そのために、1996年9月5日から12日間、吉林省の長春外国語学校で第一回中国中高校日本語教師研修会が開かれ、教師間のネットワーク作り始めた。姫野昌子東京外国語大学教授らが講師を務め、日本語の能力を向上させ、さらには映画『シコふんじゃった』、『夜逃げ屋本舗』等を上映し、日本の最近の生活、文化を紹介した。参加者全員からは「今

後もつづけてほしい」と言われて、非常に大きな成果を上げた。

2. 中等学校の日本語教師は不安定な状態にある

以上に述べたように、大学的一部分の中堅教師が主に経済的理由で出国したり企業に転勤したりしているのと比べて、中等学校での日本語を勉強する生徒数の減少に伴って、中等学校の日本語を担当する教師はもっと不安定な状態に落ち込んでいる。それは、今の中国の日本語ブームは主に大学段階と成人教育の方にあるからである。もし相応な措置をとらなければ、中等学校の日本語科目を廃止するに至る可能性もある。教師たちは安心して教えられないから、授業にも影響が出る。

3. アマチュア日本語学校の方は金儲けに走る傾向がある

全部とはいききれないが、相当数のアマチュア日本語学校は金儲けのためにやっているため、授業料が高すぎる、真面目に授業をやっていない等の学習者にとっての悪影響がある。このことについて、関係行政機関が規則を決めて監督する必要があると思う。

4. 教材と教授法の方にはまだ問題が多い

ほとんどの教材は文法中心で、授業方法も文法中心の傾向があつて、学生の「聞く」、「話す」力は弱いようである。これからは「聞く」、「話す」を中心とする教材と授業方法を重視する必要があると思う。

IV. 今後の動きについて、主に二つがあると考えられる。

1. 今の日本語ブームは引きつづき高まること

1872年にアメリカへ初めて留学生を派遣してから、今日まですでに124年が過ぎた。その24年後、1896年8月に正式に日本へ留学生を派遣してから丁度100周年になる。歴史からみれば、今の留学の規模は今までよりずっと大きい。1979年から1993年までの14年間に中国は百以上の国へ21万人の留学生を派遣した。その中で、日本への派遣留学生数は二番目になっている(アメリカが第一位である)。現在日本にいる中国人の留学生数は21,801人で(1993年5月1日の統計)、日本の受け入れた留学生総数の41.6%を占めている。もし台湾からの留学生を加えると53.4%に達する(台湾からの留学生は6,207人で、全留学生数の11.8%をしめる)。このような態勢は余程の突発的な事件がなければ、当分の間つづいていくであろう。それは今の中国はさらに教育の対外開放を拡大するため、「留学を支持し、帰国を奨励し、往来は自由」と言う方針を取っているからである。また日

本の企業の中国への進出につれて、日本語ができる従業員が多く必要になるということもある。

2. 実用的な日本語はますます必要になる

現在の中国では日本語を教える教師と日本問題を研究する研究員はほぼ飽和状態になっているが、一般的な留学と従業員向けの実用日本語の教育はまだ不十分である。これからはこういう方面の日本語の教育を高めなければならないであろう。そういう状況のもとで大学での共通外国語としての日本語と社会教育におけるアマチュア日本語はもっとブームになることが推測される。

主な参考資料

1. 中国日本語教学研究会、1992、『中国の日本語教育機構についての調査報告』。
2. 1996、中国新星出版社、『中国』。
3. 李永連著、1994、『中日文化交流の話』、中国放送テレビ出版社。
4. 外国人留学生問題研究会編、1995、『留学生担当者の手引き』、凡人社。

Japanese Language Education in China

Yonglian LI

ABSTRACT This paper expounds the current situation, problems and development tendency of Japanese language education in China from both aspects of school education and social education. Nowadays, with international society developing day by day, more and more people are learning Japanese in China which has a population of 1.2 billion, which is of momentous significance not only on the relationship and exchanges of cultural, economy and education between China and Japan, but also on the international development of whole human society. Certainly, through exchanging and linking of language energetically, human society in 21th century will be more coordinated and developed.